

—国内動向—

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向（令和8年2月）

【ポイント】

- 気温は、北・東・西日本でかなり高かった。降水量は、沖縄・奄美でかなり少なかった。日照時間は、北・東・西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった。降雪量は、北日本日本海側でかなり少なかった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万2787トン、前年同月比101.6%、価格は1キログラム当たり301円、同88.2%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万1040トン、前年同月比104.5%、価格は1キログラム当たり273円、同88.1%となった。
- 全国的に2月下旬後半に待望の降雨があり、全体的には、4～5月の春野菜は、順調な入荷が見込まれる。価格は、3月の天候次第ではあるが、平年より高値となることが予想される。

(1) 気象概況

上旬は、数日の周期で低気圧や気圧の谷が日本海から北海道付近を進んだ後、冬型の気圧配置となった。高気圧が東シナ海から日本の南へ東進する時期もあった。8日頃は、日本付近は強い冬型の気圧配置となって強い寒気が南下したため、東・西日本日本海側を中心に記録的な大雪となり、太平洋側でも大雪となった所があった。

旬平均気温は、上旬中頃に日本海を進む低気圧に向かって北日本中心に暖かい空気が流れ込んだ一方、上旬終わりには全国的に強い寒気の影響を受け、北日本で高く、沖縄・奄美で低かった。

旬降水量は、低気圧や冬型の気圧配置の影響を受けやすかった北日本日本海側で多く、低気圧の影響を受けにくかった北・東・西日本太平洋側と沖縄・奄美で少なかった。

旬間日照時間は、低気圧の影響を受けにくく、高気圧に覆われた時期もあった東・西日本太平洋側で多かった一方、低気圧や冬型の気圧配置の影響で、東日本日本海側では少なかった。

中旬は、冬型の気圧配置が長続きせず、低気圧や気圧の谷と高気圧が交互に日本付近を通過した。東日本以西は高気圧に覆われやすく、北日本太平洋側では低気圧の影響を受けにくかった。

旬平均気温は、寒気の影響が弱く、日本海から北海道付近を進む低気圧に向かって暖かい空気が流れ込みやすかったため、北日本でかなり高く、東・西日本と沖縄・奄美で高かった。

旬降水量は、東日本日本海側でかなり少なく、北・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美で少なかった。

旬間日照時間は、東・西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側、北・東日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった。

下旬は、冬型の気圧配置となりにくく、旬の初めは移動性高気圧が日本付近を覆った。

旬平均気温は、旬の初めは晴れた日も多く暖かい空気に覆われ、その後は低気圧や前線に向かって暖かい空気が流れ込みやすかったため、全国的にかなり高かった。北日本では平年差+4.4度、東日本では同+5.1度、西日本では同+4.4度で、それぞれ1946年の統計開始以降で1位の高温となった。また、東・西日本と沖縄・奄美では、夏日を観測した地点もあった。

旬降水量は、北・東日本日本海側で少なかった。旬の中頃に北・東日本を沿海州の低気圧から延びる前線が通過し、その後は本州の南岸付近を低気圧や前線が周期的に通過した。低気圧や前線の影響を受けやすかったため、西日本日

本海側と西日本太平洋側でかなり多く、北・東日本太平洋側が多かった。25日はこの時期としてはまとまった雨となり、西日本太平洋側を中心に多くの地点で、24時間降水量など各降

水量の2月としての1位の記録を更新した。

旬間日照時間は、北日本太平洋側でかなり少なく、東日本太平洋側で少なかった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
西日本				日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側

資料：気象庁「2月の天候」

1 平年を上回る水準				2 平年並み				3 平年を下回る水準			
------------	--	--	--	--------	--	--	--	------------	--	--	--

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万2787トン、前年同月比101.6%、価格は1キログラム当たり301円、同88.2%となった(表1)。

なお、ブロッコリーの指定野菜への追加は、令和8年4月からのため、2月実績までを掲載している今月の東京都および大阪市の中央卸売市場のデータに、ブロッコリーのデータは含まない。

表1 東京都中央卸売市場の動向(2月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	92,787	101.6	88.7	301	88.2	111.1	296	305	303
だいこん	7,636	90.3	86.8	94	76.5	94.0	90	104	86
にんじん	4,764	104.5	86.2	157	72.6	110.9	148	159	165
はくさい	10,899	127.4	98.1	60	34.0	83.8	59	65	54
キャベツ類	11,413	102.2	79.7	106	53.8	103.8	109	109	98
ほうれんそう	1,498	107.4	97.8	497	88.2	105.7	559	557	398
ねぎ	3,662	105.7	93.8	389	77.5	105.7	351	410	414
レタス類	5,310	97.2	87.0	248	81.7	102.9	266	263	217
きゅうり	3,921	102.6	93.6	423	88.1	94.7	443	424	399
なす	1,389	87.1	85.5	462	98.8	96.8	431	471	490
トマト	4,128	99.3	87.5	425	98.0	113.3	408	428	439
ピーマン	1,393	98.0	93.4	794	93.5	100.4	797	804	781
さといも	291	85.5	67.1	409	109.1	118.9	403	412	411
ばれいしょ	5,381	91.1	81.4	307	137.9	156.4	302	303	320
たまねぎ	7,237	88.0	80.9	259	155.3	163.2	257	256	267

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年(令和3～7年)平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、大幅に高値で推移した前年を3割近く下回り、平年を1割ほど上回った(図2)。

葉茎菜類は、はくさいの価格が大幅に高値で推移した前年の3分の1に近いものとなり、平年を2割近く下回った(図3)。

果菜類は、なすの価格が中旬以降、徐々に上げ、前年をわずかに下回り、平年をやや下回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が絶対量不足が続いていることから高値安定となり、前年を5割以上上回り、平年を6割以上上回った(図5)。なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

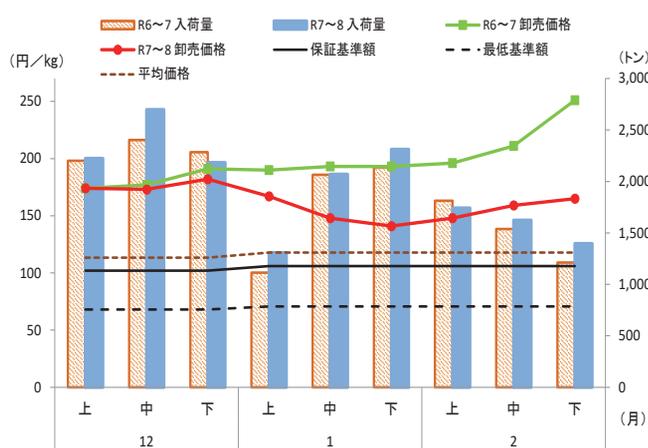


図3 はくさいの入荷量と卸売価格の推移

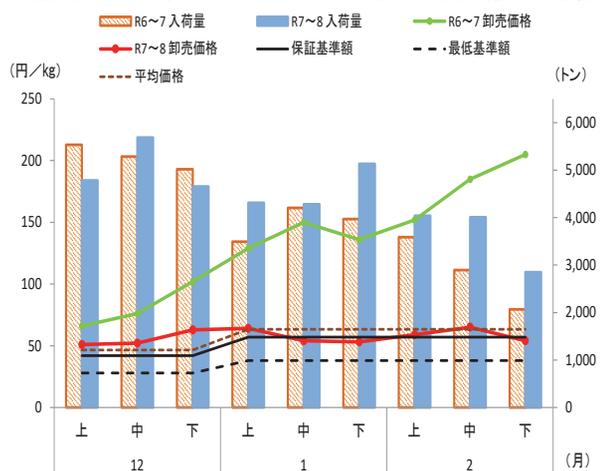


図4 なすの入荷量と卸売価格の推移

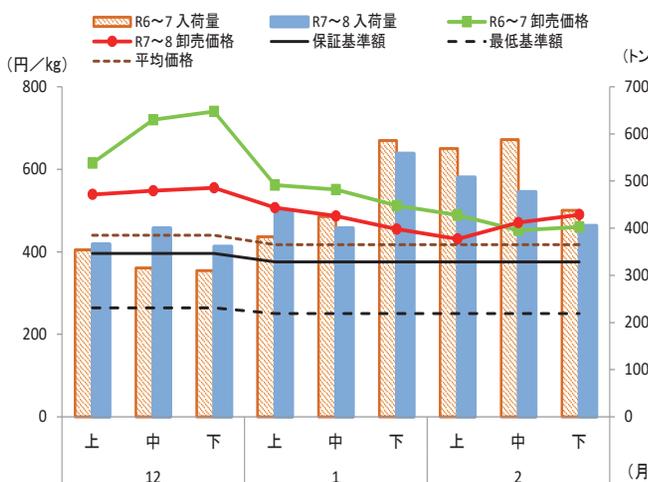
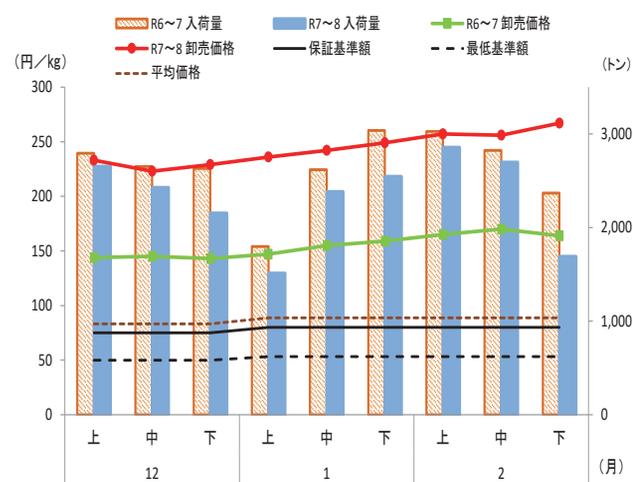


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>神奈川県、千葉県中心の入荷であった。神奈川産の作付面積は前年並みで、12月以降は乾燥傾向であったが、生育は前年並みであった。気温の低下も相まって病虫害は少ない。千葉産の作付面積は前年並みで、1月以降の低温乾燥により生育は遅延傾向であった。2月中旬以降の気温上昇で回復傾向にあるが、一部乾燥による横縞症が散見される。総入荷量は、少なかった前年を1割弱上回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、高値で推移した前年を2割以上下回り、平年を下回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉県中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、天候に恵まれ肥大が進んでおり2L～Lが中心となった。生理障害が散見されるが、病害はほとんどなかった。輸入の中国産は、前年を4割以上下回った。総入荷量は、大幅に少なかった前年はやや上回ったものの、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、大幅に高値で推移した前年を3割近く下回り、平年を1割ほど上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年の高値により作付け意欲が高く、前年をやや上回った。高温乾燥により遅延していた生育は、回復傾向である。全体に小玉傾向は変わらず、歩留まりはやや悪い。総入荷量は、大幅に少なかった前年を3割近く上回ったものの、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、大幅に高値で推移した前年の3分の1近いものとなり、平年を2割近く下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>愛知産を中心に、千葉県などの入荷であった。愛知産の作付面積は前年並みで、乾燥により生育はやや遅延していたが、適度な降雨と気温に恵まれ回復傾向であった。千葉産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と高めの気温に恵まれ、生育はやや前進傾向であった。病害が散見されるが、大きな影響はない。総入荷量は、大幅に少なかった前年をわずかに上回ったものの、平年を2割強下回った。</p> <p>価格は、下旬にやや落ち着き、暴騰した前年を5割近く下回り、平年をやや上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>茨城産、群馬産中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響で生育の停滞が散見されたがおおむね順調であった。群馬産の作付面積は前年並みで、一部、低温・乾燥などによる生育停滞に加えて、強風の影響などで品質低下が散見された。また、虫害の発生が見られた。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、低温から上・中旬までは堅調推移も、適度な降雨と気温が上昇した連休後に一気に増量したため厳しい動きとなり、やや高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をやや上回った。</p>
	ねぎ 	<p>千葉県を中心に茨城産、埼玉産など関東秋冬作中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みであった。12月は天候に恵まれたことから、肥大は進んでおり生育はおおむね順調であったが、乾燥の影響でやや鈍化した。茨城産の作付面積は前年並みで、肥大は回復しおおむね順調も乾燥の影響が出ている。埼玉産の作付面積は前年並みで、夏場の高温・乾燥の影響が続いている。病害の影響は少ないが、虫害が散見された。輸入の中国産は、前年を3割以上下回った。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、数量が落ち着いた中旬以降、堅調に推移し、大幅な高値で推移した前年は2割以上下回ったものの、平年を上回った。</p>
	レタス類 	<p>静岡産を中心に茨城産、香川産の入荷であった。静岡産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響で肥大が悪く生育は遅延傾向である。また、凍害などにより正品率が低下している。茨城産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響で生育は遅延傾向である。香川産の作付面積は、前年をやや下回った。低温・乾燥の影響で、圃場により肥大の格差はあるものの、おおむね順調で、病虫害の発生は少なかった。総入荷量は、少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、茨城産が増量となった下旬に価格を下げ、高値で推移した前年を2割近く下回ったものの、平年をわずかに上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に千葉産、群馬産などの入荷であった。宮崎産の作付面積は前年並みで、一部病虫害が散見されるものの生育はおおむね順調であった。千葉産の作付面積は前年並みで、気温の上昇と日照時間の延伸により、遅延から回復し、生育はおおむね順調である。群馬産の作付面積は前年並みで、生育は順調だが、一部低温の影響で生育が停滞している。また、病虫害が散見される。総入荷量は、少なかった前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、下旬に落ち着き、やや高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をやや下回った</p>
	なす 	<p>高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、1月の好天から生育は順調で、虫害も少なく、一部の圃場で病害が散見されるが大きな影響はなかった。総入荷量は、やや多かった前年、平年ともに1割以上下回った。</p> <p>価格は、中旬以降徐々に上昇し、前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷であった。熊本産の作付面積は、前年をやや下回った。病害が一部散見されるが生育はおおむね順調である。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作の生育は肥大よくおおむね順調である。一部に結露による障害果、病害が散見される。冬春作の樹勢は良好だが、病害が散見される。愛知産の作付面積は、前年をやや下回った。玉の肥大は良好だが、低温の影響による着色不良が散見される。総入荷量は、少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、中旬以降、堅調に推移し、大幅な高値で推移した前年をわずかに下回ったものの、平年を1割以上上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心に高知産、茨城産などの入荷であった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、一部病虫害の発生が散見される。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、病虫害が散見され、特にうどんこ病の発生が多い。茨城産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。総入荷量は、前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、堅調に推移し、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、ほぼ前年並みとなった。</p>
土物類	さといも 	<p>埼玉産を中心に愛媛産などの入荷であった。埼玉産の作付面積は、前年並みで収穫を終了した。夏場の高温・乾燥の影響で年内から不足感があり、残量も少ない。愛媛産の作付面積は前年をやや下回った。玉肥大も良く、生育は良好で、病害の発生も少ない。輸入の中国産は、前年を上回った。総入荷量は、少なかった前年を1割以上下回り、平年を3割以上下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調推移となり、高値で推移した前年を1割近く上回り、平年を2割近く上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>北海道産、鹿児島産中心の入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫を終了した。夏場の高温・乾燥の影響により小玉傾向で、発芽が懸念される。鹿児島産の作付面積は、前年を下回った。一部産地で低温・乾燥の影響による生育のばらつき、病害の発生が散見される。総入荷量は、少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調推移となり、高値で推移した前年を4割近く上回り、平年を5割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、収穫を終了した。高温・乾燥の影響で小玉傾向であった。静岡産の作付面積は、前年をやや上回った。生育はおおむね順調だが、低温・乾燥の影響で玉肥大の遅れが散見される。輸入の中国産は、前年を9割近く上回り、アメリカ、ニュージーランド産が大幅に増加している。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足が続いていることから高値安定となり、前年を5割以上上回り、平年を6割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万1040トン、前年同月比

104.5%、価格は1キログラム当たり273円、同88.1%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(2月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	31,040	104.5	92.3	273	88.1	113.5	265	274	279
だいこん	2,291	108.8	87.7	90	71.1	103.4	89	97	84
にんじん	1,954	100.9	91.4	152	72.5	113.9	138	156	163
はくさい	4,173	109.1	97.9	68	37.6	79.8	70	71	60
キャベツ類	4,162	117.0	94.7	99	51.1	100.4	100	102	95
ほうれんそう	508	144.7	101.6	470	71.1	99.2	536	544	373
ねぎ	829	94.0	91.9	490	74.0	103.5	451	519	503
レタス類	741	105.5	80.9	234	73.2	100.5	249	245	206
きゅうり	982	111.3	98.3	407	91.0	96.3	430	404	388
なす	562	102.5	120.6	430	91.0	95.0	419	434	436
トマト	1,305	108.2	96.3	385	95.1	109.0	383	384	387
ピーマン	435	111.3	139.0	732	86.9	92.6	750	753	696
さといも	95	152.4	104.4	326	68.9	96.5	342	336	293
ばれいしょ	2,162	82.4	76.0	305	134.8	161.1	302	299	318
たまねぎ	4,107	90.6	86.4	240	159.2	168.3	234	228	270

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年(令和3～7年)平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

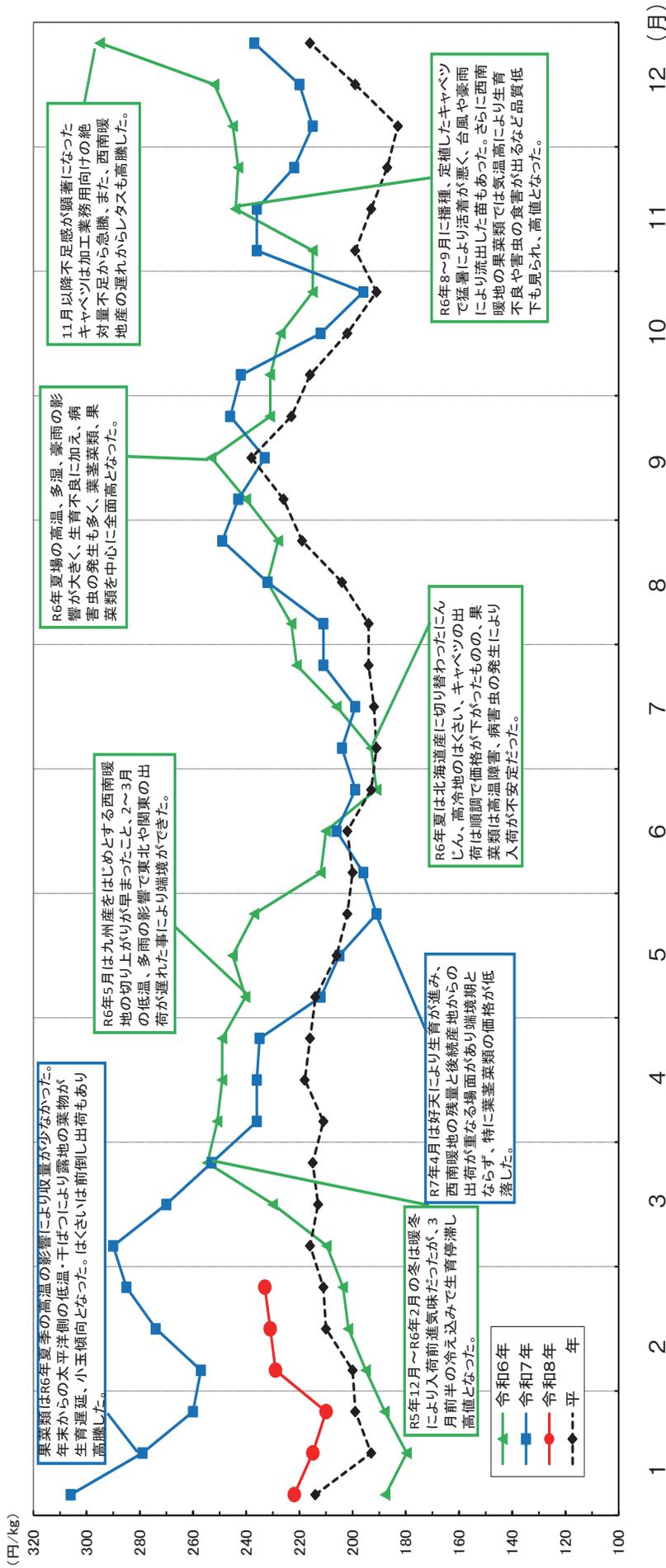
類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産と徳島産が主体となり、長崎産や和歌山産などの入荷があった。主力産地の一つである和歌山産の切り上りが早く、旬を追うごとに入荷量は激減し、月間では前年の半分以下となった。他産地は太物が少なく、旬を追うごとに入荷減量傾向となった。月間全体の入荷量は、少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、太物が少ないことで伸び悩み、前年を3割程度下回り、平年をやや上回った。</p>
	にんじん 	<p>鹿児島産が中心となり、長崎産の残量入荷があった。長崎産は前進出荷の影響により切り上がり早く、中旬以降の入荷量が激減した。中旬以降は寒波による気温低下と雪や降雨の影響もあり、全体の入荷量も旬を追うごとに減少となった。太物が少なく国産の入荷が不安定だった時期に増えた輸入の中国産は減り、前年の半分以下となった。月間全体の入荷量は、前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、不足感もあり旬を追うごとに上押し、極端な単価高だった前年を3割近く下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>

<p>葉茎菜類</p>	<p>はくさい</p> 	<p>秋産地の愛知産と茨城産、兵庫産が主体となる入荷に、後続の春産地である長崎産の入荷もスタートした。干ばつの影響で出遅れていた秋産地のものが、2月に入り集中的な出荷となり、上・中旬の入荷量は多く、さらに春産地の長崎産も前進出荷したため入荷量が多く、全体として、上・中旬の入荷量は、前年を大幅に上回った。旬を追うごとに入荷減量となったものの、月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度上回り、作付けが年々減少している影響もあり平年をやや下回った。</p> <p>消費地の気温が高く、需要が伸びない中で量販店からの発注が少なく、荷動きも鈍化し、さらに加工向けも取引量が増えず、販売に苦戦した。価格は、全体としては旬を追うごとに下落を続け、月間では前年を6割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p>
	<p>キャベツ類</p> 	<p>寒玉キャベツは愛知産が中心となり、大阪産などが入荷があった。春キャベツも中心となったのは愛知産で、その他、和歌山産や兵庫産の入荷があった。上旬は干ばつの影響が残り入荷量は伸び悩んだが、中旬以降の降雨により回復傾向となった。月間全体の入荷量は、前年を大幅に上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、上旬は干ばつにより入荷量が少なかったため高値で推移したが、入荷増量に伴い落ち着いた。下旬は、量販店の荷動きが鈍化したため販売に苦戦した。月間の価格は、極端な単価高だった前年の半分程度となり、平年をわずかに上回った。</p>
	<p>ほうれんそう</p> 	<p>福岡産と徳島産が主体となる入荷であった。干ばつの影響もあり遅れていたものが、気温上昇に伴って急激に出荷増量し、旬を追うごとに入荷増量となった。月間全体の入荷量は、前年を4割以上上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>末端の荷動きは悪く、需要が伸びない中で販売に苦戦し、価格は、入荷増量に伴い下落傾向となり、下旬には急落した。月間の価格は、高かった前年を3割近く下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	<p>ねぎ（白ねぎ）</p> 	<p>群馬産を中心として、主力の鳥取産、静岡産、埼玉産の入荷があった。各地とも産地出荷量は平年並みであり、鳥取産は降雪の影響により、入荷が不安定となった時期があった。全体的には気温高で前進出荷気味となり、旬を追うごとに入荷減量の傾向となった。月間全体の入荷量は、前年をやや下回った。</p> <p>価格は、消費地の気温が高く、引合いが強まらない中で、単価高だった前年を大幅に下回った。</p>
	<p>ねぎ（青ねぎ）</p> 	<p>青ねぎは、徳島産を中心に高知産や近隣の大阪産などが入荷があった。小ねぎは高知産と静岡産が主体となった。各産地とも干ばつの影響が強く残り、生育が悪く産地出荷量が伸びない中で、品質も悪く下位等級品の比率が高い状況が続いた。月間全体の入荷量は、前年を下回った。</p> <p>価格は、末端の荷動きが悪い中、品質低下品も多く低迷を続けた。月間の価格は、前年を大幅に下回った。</p>
	<p>レタス類</p> 	<p>玉レタスのラップ物は兵庫産が中心となり、香川産などが入荷もあった。裸レタスは九州産地の長崎産や鹿児島産が中心となる入荷であった。各産地とも前月から続いていた干ばつの影響が残り、月の前半は入荷量も伸び悩んだが、月の後半は降雨もあり、気温上昇から回復傾向となった。月間全体では前年並みの入荷量であった。サニーレタスとリーフレタスはともに福岡産が中心となり、香川産の入荷もあった。レタス同様に干ばつの影響で産地出荷量が伸びず、不安定な入荷が続いた。レタス類全体の月間入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>消費が鈍く、量販店からの発注も少なく販売に苦戦し、玉レタス、サニーレタス、リーフレタスともに、価格は旬を追うごとに下落傾向となった。月間の価格は、前年を3割近く下回り、平年をわずかに上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に高知産、徳島産の入荷があった。気温が高く、各産地とも順調な出荷が続いたが、荷動きは悪く積極的な集荷とならなかった。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、消費が伸びない中で入荷増量に伴って旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>
	なす 	<p>千両系は、高知産を中心とした入荷であった。長なすは、福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。気温が高く、日照量も多い状況が続き、産地出荷量は潤沢であったが、量販店の売場は少なく積極的な販売とはならなかった。月間全体の入荷量は前年をわずかに上回り、平年を2割以上上回った。</p> <p>売場は少なく、消費も伸びず販売には苦戦した。月間の価格は、前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。愛知産は順調な出荷であった。熊本産は、定植時に大雨に遭った影響により産地出荷量が伸びず、旬を追うごとに入荷減量傾向となり、月間の入荷量は前年をかなり下回った。月間全体の入荷量は、少なかつた前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。</p> <p>上旬に消費地の気温が低かつたため、消費が伸びない中で、旬を追うごとに気温は上昇したが、大きな引き合いがなく価格は伸び悩んだ。月間では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産が中心となり、高知産も主体となる入荷であった。好天続きで着果状態が良く、産地出荷量が多い状況が続いた。全旬を通じて潤沢な入荷となり、月間全体の入荷量は前年をかなり大きく上回り、平年を4割近く上回った。</p> <p>売価が高く、入荷量が多い中でも荷動きは鈍く、販売には苦戦した。月間の価格は前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産が中心となる入荷に、下旬から鹿児島産の入荷があった。愛媛産は、上旬には順調な入荷が続いたが、消費地の気温高も影響して売れ行きが鈍くなり、中旬以降には落ち込んだ。輸入の中国産の入荷もあり、需要が少なく全旬とも入荷は低迷した。月間全体の入荷量は、前年を5割以上上回り、平年をやや上回った。</p> <p>消費地の気温上昇に伴って需要が落ち込み、価格は旬を追うごとに下落した。月間の価格は、前年を3割以上下回り、平年をやや下回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は鹿児島産が中心となり、北海道産の残量入荷もあった。上旬までは長崎産の入荷もあり、九州産地の順調な出荷が続き、旬を追うごとに入荷増量となった。月間全体の入荷量は前年を上回った。メークインは北海道産が中心となる入荷であり、前年の天候不順による不作の影響で残量が少なく、月間の入荷量は前年をかなり下回った。ばれいしょ全体の月間の入荷量は、前年を2割近く下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、不足感からの高値の影響が残り、月間では、前年を3割以上上回り、平年を6割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産の残量入荷が中心となり、新物の長崎産と兵庫産の入荷もあった。北海道産は、前年の天候不順による不作から貯蔵量が極端に少なく、産地出荷量が前年の半分以下で入荷量が少ない状況が続いた。入荷量が不安定で上旬は前年の3分の1程度、中旬に半分程度になり、下旬には再び3分の1程度になり、月間の入荷量は前年の4割程度であった。長崎産は、前月までの干ばつと急な気温低下で生育が遅れ、旬を追うごとに増加傾向となるも入荷量は伸びず、月間では前年を大幅に下回った。不足分を補う形で、業務用向けに輸入の中国産が前年を大きく上回って入荷した。月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰が続き、月間では前年を6割近く上回り、平年を7割近く上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬																																	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	240	245	237	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295	
令和7年	306	279	260	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249	243	233	246	242	212	196	236	222	215	220	237	
令和8年	222	215	210	229	231	233																														
平年	214	193	199	200	210	211	216	213	215	211	218	216	214	206	202	200	202	193	191	192	194	194	204	219	226	238	223	216	202	191	199	193	187	183	199	216

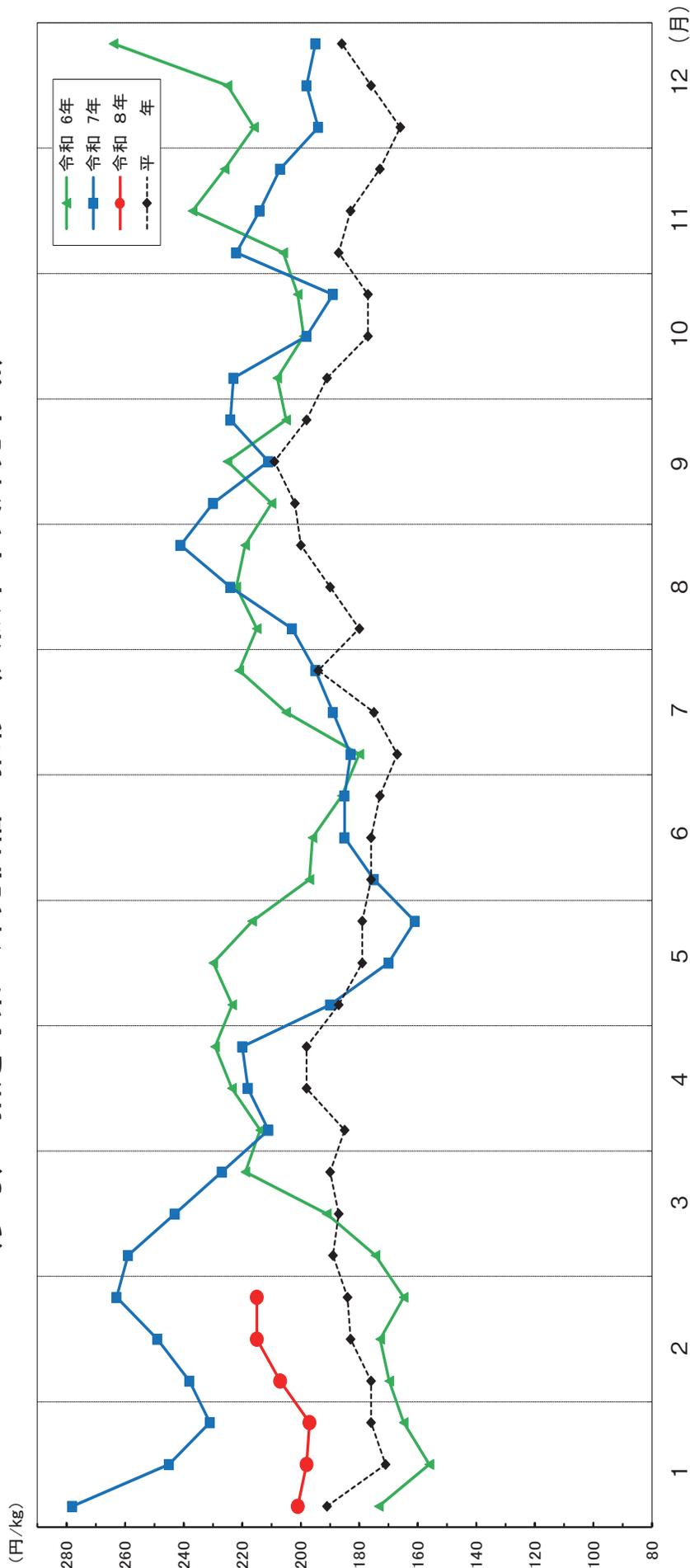
資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和3年～7年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

注3：ブロッコリーの指定野菜への追加は、令和8年4月からのため、2月実績までを掲載している当該グラフに、ブロッコリーのデータは含まない。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬																																		
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264	
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195	203	224	241	230	211	224	223	198	189	222	214	207	194	198	195	
令和8年	201	198	197	207	215	215																															
平年	191	171	176	176	183	184	189	187	190	185	198	198	187	179	179	176	176	173	167	175	194	180	190	200	202	209	198	191	177	177	187	183	173	166	176	186	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和3年～7年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。

注3：プロッコリーの指定野菜への追加は、令和8年4月からのため、2月実績までを掲載している当該グラフに、プロッコリーのデータは含まない。